

京都学習協の集中セミナー 募集要項

申し込みは、このテーマを学びたいと思う方は誰でも参加できます。

申し込みの手続きは、簡単です。

「申込書」に必要事項を記入し、受講料をそえて申し込んでください。

講義時間は、午後1時30分～6時（休憩も含まれます）

受講料は、3,000円です。（税込み）

会場は、『京都学習会館』です。



二・四輪共に駐車場はありません。二条城市営駐車場へお願いします。

地下鉄丸太町駅・二条城前駅から『京都学習会館』まで歩いて10分以内です。

京都学習協の労働者・青年集中セミナー	申込み日時	年	月	日
フリガナ		性別	年齢	
氏名:		男・女	才	
現住所:				
職場・学園:				
労働組合名:	(全国単産名:)			
電話: 職場 ()	自宅 ()			



を許すな!!



ま.....

集中セミナー

日時: 3月30日(日) 午後1時30分～6時
会場: 京都学習会館(第1会議室)
受講料: 3000円(消費税込み)

テーマと講師

「日本の軍隊」はいま.....

講師は 井手 幸喜・京都橘大学講師

イージス艦が漁船に衝突し国民の強い怒りがひろがっている。事故の真相はいまなお明らかにされない。沖縄では米兵の少女暴行事件...。軍隊とはなにか、軍隊によって国民生活は何を強要されるのか...。その現実と歴史、いまその深層を学ぶ。

都労働者学習協議会
〒602-8147
都市上京区堀川丸太町西一筋目上ル
『京都学習会館』内
電話(075)841-8141
FAX(075)821-3665

近代社会に生きた人々は軍隊をどう捉えてきていたのか、人々にとっての軍隊体験とはいかなる意味をもったのか。
08年「日本の軍隊」はどのような軍隊なのかを考えよう。

井手幸喜先生からのよびかけ

「蟻の兵隊」というドキュメンタリー映画が06年の7月に公開されました。中国北部山西省で、10年間にわたり三つの軍隊を経験させられた、奥村和一さんの物語です。監督は池谷薫さん、三つの軍隊とは帝国陸軍、中国国民党軍、そして中国人民解放軍を指します。映画そのものも是非一度観てみたいと思いつつその機会を失っていましたので、岩波ジュニア新書の『わたしは「蟻の兵隊」だった』を買い求め、読んでみることにしました。その本で、奥村さんは、軍命で残留させられた怒りとともに、かつて無辜(むこ)の中国人を手にかけて加害者としての苦しみを赤裸々に語っています。命令で中国に残り、内戦に巻き込まれ重傷を負い、帰国した時には逃亡兵としての扱いを受けます。彼のなかで戦争は終わってはいませんでしたし、自らが中国で経験した戦争とは何だったのかを問い続けることとなります。

近代社会での日本の戦争とは何だったのか。総力戦としてたたかわれた戦争が国民にいかなる生活を強いたのか。

そんな、戦争そのものを問う視点での叙述に接することは多いのですが、奥村さんが経験した戦時中の軍隊のように、反近代的で精神主義的な軍隊になってしまうのは何故なのでしょう。現役で徴収される青年男子の数は、戦時を省けば、総数の3割に満たなかった事実からすると、近代社会に生きた人々は軍隊をどう捉えてきていたのでしょうか。人々にとっての軍隊体験とはいかなる意味をもったのでしょうか。

例えば、15年戦争期、兵士はしばしば「一銭五厘」と表現されます。ところが、召集令状(赤紙)は葉書ではなく、戸籍係によって直接本人に届けられるし、葉書は一銭五厘ではなく二銭でした。「一銭五厘」とは二重におかしい言い回しなのです。

事実は誰もが承知していたことなのでしょうが、事実は捨て去られ、「一銭五厘」という言葉が反復して、社会のなかで語られ、今日までその「神話」が語り継がれています。

何故そんな表現がとられ、「神話」が出来上がっていくのでしょうか。天皇の軍隊とは何だったのでしょうか。みなさんとそのことをじっくり考えてみたいと思います。



京都学習協の集中セミナー

学習テーマ “「日本の軍隊」はいま……”

第1 講義

イージス艦事故から何が見えるか

イージス艦事故、沖縄米兵犯罪、基地問題(岩国、横須賀……)など、「軍隊」が引き起こす犯罪、国民との対立が激しくなっている。何が起きているのだろうか。

第2 講義

日本の軍隊は日本社会・国民にとってどんな存在であったか

天皇の軍隊とはどういうものか、日本の軍隊の成り立ちと理論を学ぶ。

第3 講義

2008年-「日本の軍隊」は、世界のトップレベル

エスカレートする海外派兵、米軍との一体化を強める「日本の軍隊」、そのゆくえは……。日本社会・国民生活に関わりがないのか

講義日程は、……講義の進行状況で各講義の時間が動きます。

- ・第1 講義 1時30分～2時50分(80分)
休憩 5分
- ・第2 講義 2時55分～4時15分(80分)
休憩 5分
- ・第3 講義 4時20分～5時40分(80分)
- ・質疑応答 5時40分～6時00分

ずっと考えている。漁船に衝突した海上自衛隊のイージス艦はなぜ、衝突一分前まで自動操舵(そうだ)で直進を続けたのだろうか。太平洋の真ん中など、大海原で周囲に船がないときに使うのが自動操舵であろう。多くの専門家が、船舶の往来が多い場所では、自動操舵に切り替えるのが常識だと口をそろえている。事故現場がまさに該当する。「そのけそのけイージス艦が通る」。民主党の鳩山由紀夫幹事長が先日の国会審議で、自動操舵のまま進むイージス艦をこう例え、「根底に官尊民卑の発想があるのでは」と追及している。小林一茶の「雀(すずめ)の子そのけそのけ御馬が通る」をまねたのだろう。作家の司馬遼太郎さんが生前、よく書いたり話していたという終戦直前の体験が頭に浮かぶ。戦車隊の一員として栃木県内に駐屯し、本土決戦のときは街道を南下して敵を迎え撃つ指令を受けていた。だが東京などから避難してくる人たちで、街道はあふれかねない。司馬さんは部隊にやってきた大本営参謀に、「交通整理はちゃんとあるんですか」と質問した。ぎょっとした顔で考え込んだ揚げ句の答えは「ひき殺していけ」だったという(『朝日ジャーナル』での対談)。戦争の本質を端的に表している「そのけそのけ戦車が通る」である。今回の「そのけ」でも、衝突原因の解明や組織などの見直しと同時に、自衛隊員の意識にもっと着目したい。「そのけ」意識は本当はないのか。戦前と同じとは思わないが、共通性がまったくないとは言い切れない、深刻な事態に見える。(「東京新聞」20080226)